



すべての工程を委員会と大学生が手作りすることにより、技術が必要な場面では、左官職人だった上私都の高齢者に指導を仰ぎながら地域交流、つながりのシンボルとなるピザ窯が平成29年8月に完成しました

上私都地区まちづくり委員会の取り組み

上私都に係る全ての人々が『つながる場』



集落支援員
宮崎 靖大さん



委員長
安藤 一富さん

上私都地区まちづくり委員会『ここいち』は、設立7年目になります。カフェ『ここいち』の事業を主体として各種体操を行事に組み入れた活動が週に2〜3回行われています。カフェ『ここいち』では「笑う」ことを大切にして手芸活動が行われており「みんなが生徒、みんなが先生」で互いに教え合いながら、失敗して笑い、成功して喜んで、たくさんおしゃべりをして楽しい時間を過ごしています。ある利用者さんが「ここに来るとよく寝ることがができる。ここは私の医者のようにだ」と。人とふれあったり、笑ったりすることがその人の生きがいや楽しみにもなり、認知症の予防にもつながっています。



昼食風景：座るところもないほどいっぱいです

また、春夏秋冬には交流会を行っています。地域の子どもたちから大学生、高齢者、障がいのある方など普段の活動になかなか参加できない幅広い世代の方々が参加しています。秋の交流会が11月23日(金祝)に、上私都地区福祉施設『ここいち』で開催され、約60人の方たちが集まりました。集落支援員の宮崎靖大さんによる号令により、カレー・ピザ・巨大せんべい・ヤマメ釣りの4つのチームに分かれて作業に取り掛かります。男性は、火をおこし、釣れたヤマメやせんべい、ジビエを焼きます。また、昨年、大学生と地区の方たちと一緒に造った自家製のピザ窯で特製ピザを焼き続けます。昼食にカレーや季節の果物を堪能した後、午後からは災害に備えてドラム缶風

呂の体験も行われました。宮崎支援員は、「交流事業が、自然な形で福祉教育、地域共生社会への模範的な取り組みとなっていると思います。久しぶりに会って嬉しそうな表情をしている人を見るとそれだけで交流会を行う意義があると強く感じます。これからも皆さんと『誰もが楽しみ笑うこと』を大切に、活動を充実させていきたいと思えます」と抱負を語っています。

安藤一富委員長は、「大学生から様々なことを提案してもらい、交流会が盛り上がりつつあります。これからも、交流会などを地域住民と大学生が一緒に回り、地区の歴史などを話し、地域の誇りや愛着を表現する場、大学生が来るきっかけづくりの場としたい。地域の野菜を大学祭で販売しているが、今後は、大学生に野菜作り体験をしてもらって農業の作る喜びも知ってもらえたらありがたい。また、地域の皆さんや大学生などが、いつでも、気軽に立ち寄ることが出来る『つながる場』になることが一番の願い」と話されています。

次ページで、昨年2月に開催された鳥取県福祉研究会で鳥取県知事賞を受賞した上私都地区まちづくり委員会の取り組みの発表をご紹介します。

上私都地区と大学生の交流がもたらした 変化と地域共生社会への可能性



八頭町社協
 コミュニティ
 ソーシャルワーカー
 藤田 亮二さん

―大学生が交流のキーパーソン

大学生との交流のきっかけとなったのは平成26年の夏休みの子ども交流会です。八頭町社協が主催する小学1〜3年生を対象とした福祉・自然体験事業「優愛塾」にボランティアとして参加していた公立鳥取環境大学の宮崎靖大さん(現上私都地区集落支援員)に声をかけたことで、宮崎さんや宮崎さんが参加しているサークル



新聞で作った棒で行う『上私都かるた』

の仲間たちが、上私都での交流会に参加してくれるようになりました。

その年の秋の交流会の後、大学生が「せっかくできた上私都とのつながりをこのまま終わらせたくない。今度は自分たちが主体となり、交流を企画したい」と提案。こうして、大学生との協働企画による冬休みの交流が動き出した。交流の目玉は『上私都かるた』。委員会と大学生が事前に地区内の集落を回って写真を撮り、交流会で写真から絵札を選び、読み札を参加者みんなで考えて作ります。そして、高齢者と子どもが一緒に参加できるように、新聞紙で作った棒を使ったルールを大学生が考案してくれました。みんなが参加できるという福祉的視点がポイントです。

こうした交流を重ねるうち、自然豊かな地域の良き人のつながりの豊かさを感じた宮崎さんが大学卒業を機に上私都への定住を希望。委員会と社協が地域の受け入れを支援し、定住が実現しました。大学生と地区をつなぎ、新しいアイデアや取り組みを生み出すキーパーソンとして活躍することになりました。



地域や地域外の様々な方が大集合

―障がい者・要介護者も丸ごと交流

同じころに社協の手話講座修了生の皆さんが「やず手話の会」として活動を開始され、聴覚障がいのあるAさんの行事参加の際にコミュニケーションを支援し、手話講座ではゲスト講師としてAさんを招くなどして関係を深めていました。上私都の交流の充実を見て、誰もが参加できる場づくりを思い描いていた中、こうしたボランティアの皆さんの活躍が丸ごと交流会の実現を後押ししました。

男性を中心にピザ窯に火を入れ、たき火でジビエを焼き、子どもたちはいろんな所を回って作業を手伝います。Aさん・Bさんは、時には手助けを受けながらもできることを担います。手話の会による手話歌の披露と簡単な手話講座では、Aさんが進んで指導役に。皆で手話を学ぶことをAさんはとても喜ばれ、指導にも熱が入ります。

「障がいのある方を当たり前に受け止める姿をみて、これが普通のことだと感じた」他にも介護を受けている人や障がいがある人がいるのであれば、もっと参加してもらえようにならたらと思う「今日はあの人たちに来てもらえて良かったと思う、ぜひこれからも受け入れて欲しい」と終了後の振り返り会で、皆さんの意識の変化を感じるこうした発言がありました。福祉意識は、当事者との関わりふれあいによって変化し、高まっていくもの、福祉学習は難しいことを勉強するのではなく、一緒に関わられる場面をたくさん作ることだと実感しました。

平成29年秋の交流会では「上私都の丸ごとみんながながれること」をテーマに、上私都に住む子ども・高齢者Aさん車いす利用で介護が必要なBさん委員会・ピザ窯を通じてつながった地域の人たち・大学生・手話の会が参加。地元食材にこだわったピザを一緒に作り、

上私都地区での大学生との交流は地域の活力や連帯感の向上などの好影響を与え、要介護者や障がい者の社会参加のきっかけとなっています。これは今後の地域福祉の方向性である「わが事丸ごと」の地域共生社会の実現につながるものです。